

能登珪藻土に宿る力、震災を超えて未来へ ～大地の力を、希望の力に～

第4回 能登地域の海水産珪藻土を形成した日本海の地史的背景

— 海が育み、人が刻んだ技を繋ぐ、能登燃焼器工業株式会社の父子の軌跡 —

国立高等専門学校機構 石川工業高等専門学校 建築学科 准教授 **横林 修造**

■日本海の形成が育んだ能登地域の海水産珪藻土

前報では、能登地域に代表される海水産珪藻土が粘土成分を多く含有し、特有の赤色を帯びていることについて述べた。本報では、日本列島の形成過程という時間軸に視点を置き、能登地域の海水産珪藻土に多量の粘土成分が混入した経緯について述べたい。

現在から約2000万年前の日本列島は、ユーラシア大陸に隣接しており、形成途上の日本海は北太平洋に細く繋がる程度の海域を有する小規模な多島海であった。中・高緯度の北太平洋にある珪藻の種が能登珪藻土を生成した日本海の珪藻の種と繋がる事実は、当時の日本海が北太平洋と生物群集を共有するほどの開放性を備えていたことを示唆している。

当時の日本海は珪藻の繁殖に適した富栄養化の環境にあり、同時にプレートの沈み込みに伴う地殻変動が進行することで、現在の背弧海盆である日本海と日本列島の原型が急速に整えられつつあった。日本列島は1500～1600万年前頃より東日本と西日本の2本の島弧に分かれ、それぞれ根室半島と五島列島付近を支点に東側は反時計回り、西側は時計回りに回転しながら観音開きのように大陸から離れることで、現在の基本的な配置を形成した。約180万年間かけて移動した日本列島の距離は約400kmに及び、その平均移動速度(約20cm/年)は、現在の太平洋プレートの平均移動速度(約8cm/年)を大きく上回る。北陸地域の珪藻を含む砂・泥(粘土成分)は、この急速な日本海の拡大による海盆の深度の増加に伴って厚く堆積した。富山市八尾町ではこの通常より速い堆積速度によって形成された堆積層の厚さが約2kmに達する。

能登を含む北陸地域では現在、沿岸で崖が切り立ち、海盆の深度が急激に増大する地形が広く分布している。これ

らの地形的特徴は、プレートの沈み込みに伴って急速に進行した地帯移動が起因すると考えられている。また、日本海側の地域の中でも大陸から最も離れている北陸地域は多湿な日本海側気候に属しており、日本海上で多量の水蒸気を取り込んだ季節風が多湿で降雪量の多い気候をもたらしている。この厳しい寒さを防ぐために能登では七輪を用いる生活文化が育まれ、また、急峻な海盆により粘土成分を多量に含んだ珪藻土が能登の人々に独自の「珪藻土切り出し技術」を与えた。筆者はこのように気候・地形・生活が重なり合いながら形成されてきた能登の文化を未来へと受け継ぎ、大切に守り続けたいと考えている。

■被災前の能登燃焼器工業の姿

震災前まで能登半島の最北端に位置する珠洲市に拠点を置き、同市の無形文化財である「珪藻土切り出し技術」によって主に七輪などを製造してきた能登燃焼器工業は、現在、大きな事業の岐路に直面している。創業60年以上を誇る能登燃焼器工業の工場が立地する上戸(うへど)町は、能登半島において最も豊富な珪藻土を産出する「飯塚層」に隣接した「飯田層」の分布する地域に位置する。豊富な珪藻土が産出される上戸町では、町内の工場から周辺の坑道までの搬出入経路を短く設けることが可能であり、能登燃焼器工業は立地的に優れたインフラ環境を有していた。

能登燃焼器工業で「珪藻土切り出し技術」を支え続け、事業を展開してきた舟場和夫氏の家族の元に後継者である息子の慎一氏が都心よりUターンで戻ってきたのは平成24年のことである。この年は、以前から採掘してきた旧坑道を閉坑し、工場付近において新坑道の試掘を開始した時期であり、社内は新たな製造体制への移行に向けて期待が高まり、活気に満ちていた。慎一氏の帰郷後、新坑道は令和6年能登半島地震に至るまでの約12年間にわたり掘り進めら